

(あすを探る 共生・社会) 多様なルーツ、新たな活力

森千香子

2017年12月21日05時00分

ニューヨーク・タイムズ紙の今年の映画ベスト10に異色のホラー映画『ゲット・アウト』が選ばれた。ニューヨークに住むアフリカ系アメリカ人のクリスは、白人の恋人ローズの実家に招待される。人種の違いから拒絶されるのではとクリスは不安だが、郊外の邸宅に住む両親の温かい対応に安堵（あんど）する。だが次第に様子がおかしいことに気づき、やがて予期せぬ恐怖に遭遇する——。「できることならまたオバマ（前）大統領に投票する」と屈託なく語る「リベラル」な人々の内面に「隠された差別」を鮮やかに描いた衝撃作だ。

だが、それとは一見、対照的な「露骨な差別」も根強く存在する。先月23日、自民党の山本幸三衆院議員は、同党の三原朝彦衆院議員のアフリカ支援活動に触れ、「何であんな黒いのが好きなのか」と発言し、批判が起きると「差別的な意図はなかった」と撤回した。言葉どおり「差別的な意図はなかった」かもしれない。だとしても、政治家のこうした発言は、アフリカにルーツをもつ日本の若者に「居場所がなくなってしまふ気持ち」を与えた。

もっとも「隠された差別」も「無自覚な差別」も根の部分でつながっている。そして差別を受けた当事者にとっては、尊厳を傷つけられ、アイデンティティーに打撃を与えられるという意味で同じ結果をもたらす。このような差別や排外主義が世界中で渦まいている。

だがそのかわらで、未来への希望も芽生えている。今月14日、NPO法人アフリカ日本協議会が運営する「アフリカンキッズクラブ」のメンバーなど42名が連名で山本議員に公開レターを送り、面会を求めた。その一人の藤井咲詩（さうだ）さん（15）はバスケット部所属の元気な高校生だ。「発言をきいて悲しむのではなく驚いた。グローバル化の時代に日本を引っ張る立場の人がこんなことを言うのかと思った」。実名で取材を受けるのは勇気がいったが、山本議員に気持ちを伝えたい思いが勝った。4月から岡山大学に進学する津山家野（かや）さん（19）も「一般人の発言だったら気にしないが、日本のリーダーである政治家の言葉だから心配だ」と言うがその姿勢は非常に前向きだった。「山本議員はおそらくアフリカをよく知らないのではないかと。アフリカやそこにルーツをもつ子どもの存在を知ってほしいし、山本さんの考えも聞きたい。一方的に怒りたいのではなく、お互いに高め合いたいと、面会を申し込んだ」。二人との会話の後、私はこの二人のような若者は現実から逃げない強さを持つ「希望」だと感じた。山本議員にはこれを受け止め、面会を実現させてほしい。現在、日本の新生児29人に1人は親の片方または両方が外国籍だ。今回の件は新世代の日本人の存在とその頼もしさを教えてくれた。

外国にルーツをもち日本で育った若者の中には、研究者になる人もいる。今月17日、上智大学で開催された「連続講座・移民二世からの研究発信」では、ペルー人の両親をもつ宇都宮大学大学院の小波津ホセさん（33）が研究報告を行った。小波津さんは、在日ペルー人2世の文化変容と社会進出について調査し、学校での差別や地域での孤立を明らかにした。母語を喪失した自分の経験をふまえ、「学校での日本語支援は進んだがアイデンティティーの安定化には母語支援も必要」と指摘する。「排外主義」や「分断」が時代のキーワードに用いられるが、その一方で日本社会の多様化は着実にすすみ、新たな活力を生

み出している。

2020年の東京五輪の基本理念のひとつは「多様性と調和」だ。それによれば「あらゆる面での違いを肯定し、自然に受け入れ、互いに認め合うことで社会は進歩」する。そうならば、多様なルーツをもちながら日本で暮らす若者たちは、社会の貴重な財産であり、大切にしなければならない。それができるか否かに未来がかかっている。

(もり・ちかこ 72年生まれ。一橋大准教授・社会学。著書に「排除と抵抗の郊外」)

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.